



村上英二氏蔵後漢孝子伝図画像鏡 図一 閔損図



図二 曾参図



図三 孝子伝図画像鏡 全図

曾参と閔損

——村上英二氏藏漢代孝子伝図画像鏡について——

山川 誠 治

〔抄録〕

孝子伝図は、孝子伝を圖像化したものであり、後漢から六朝期にかけての遺品は、発掘されたものでもかなりの数に上り、往時その製作が盛んであったことを今日に伺わせている。この中でも特に後漢武氏祠画像石については、宋代以来著名なもので、我が国においても過去に、長廣敏雄氏が本格的な図像解析を行ったことが知られるが、今般、同画像石の孝子伝図の図像と絵柄を全く同じくする、人物画像鏡の存在を知った。それがここに取り上げる後漢孝子伝図画像鏡である。このたび村上英二氏の格別なる好意によつて撮影調査を得ることが出来た。当遺品が貴重なのは、

我が国にのみ伝わる完本孝子伝の一つ、陽明本孝子伝に記載される閔損譚、曾参投杼譚が描かれていることである。このことはテキストとしての孝子伝研究にとつて、陽明本の成立期を探る上で、一級の資料的価値を有していると言えるだろう。小稿では、その図像の公開を始め、孝子伝との関係など、後漢孝子伝図画像鏡について紹介、報告を試みる。

キーワード…曾参、閔損、孝子伝、画像鏡、武氏祠画像石

一

編者は未詳ながら、今昔物語集、天竺・震旦部の有力な典拠となつたほか、中世浄土宗関係仏書等の文献に、しばしば抄出利用されることのある注好選に、次のような話が出てくる。¹⁾

閔騫は母が去るを還し留む第四十七

魯の人なり。父、後妻を娶ぎす。時に母に二子を生ぜり。其の後、母牛の糞を蔵せり。後の時に御車にして、即ち父閔騫を召して之を責めて誠め懲らす。後の時に母が所為を知りて、妻を放ちてむと欲。時に閔騫泣いて曰はく、「母に一子在り。又二子在り。若

し母去りなば、三子寒いて死なむ。大人之を思へ」と。父愧ぢて止む。後母の過を悔いて遂に二子と均し。

魯の哀公之を聞きて、遂に自ら費ひて邑の宰と為す。

(原漢文。東寺觀智院本、注好選上・47)

この話は、我が国にのみ伝存する唯一の完本孝子伝とされる、船橋本及び陽明本孝子伝下・10を原拠とすると考えられる。両孝子伝の本文を示せば次の通りである(陽明本は黒田彰先生ご所持の写真に拠る)。

船橋本

閔子騫、魯人也。事後母蒸々。其母無道惡騫。然而無怨色。於時父載車出行。子騫御車、數落其轡。父怪執騫手。寒如凝氷。已知衣薄。父大搏々、欲逐後母。騫涕諫曰、母有一子苦。母去者二子寒也。父遂留之。母無怨心也。

陽明本

閔子騫、魯人也。事後々母々无道、子騫事之无有怨色。時子騫為父御失轡。父乃怪之、仍使後母子御車。父罵之、騫終不自現。父後悟、仍持其手、々冷。看衣々薄、不如晚子純衣新綿。父乃凄愴、因欲追其後母。騫涕泣、諫曰、母在一子单、去二子寒。父遂止。母亦悔也。故論語云、孝哉、閔子騫、人不得間於其母又昆弟之言、此之謂也。

右は、孔子の高弟で孔門十哲の一人でもある閔損、字は子騫の継子虐めを題材とした孝子説話である。同話としては、隋書經籍志、旧唐書經籍志に師覺授撰と伝える孝子伝(太平御覽四二三所引)、逸名孝子伝(太平御覽三十四、八一九所引)、また韓詩外伝(類説三十八所引)、

說苑(芸文類聚二十所引、淵鑑類函二七一所引)、敦煌本勵忠節抄、敦煌本事森、蒙求²⁹⁶注(古注、準古注は「史記」所引、新注は「旧注」とする)等に引かれており、我が国においては沙石集三下、蒙求和歌四、内外因縁集「閔子賢事」、御伽草子「二十四孝」「閔子騫」以下、和漢の諸書に所収されている。閔損に關しては論語・先進十一に、

子曰、孝哉、閔子騫、人不間於其父母昆弟之言

とし、古くから儒家においても孝徳者として認められてきた人物である。両孝子伝のほか記される閔損譚については、後漢から六朝期にかけて、石室、石棺、石床等に描かれた孝子伝図と呼ばれる遺品の中にも図像化したものが幾例か存在する。

閔損図については、後漢武氏祠画像石の「子騫後母弟、子騫父」(閔子騫与仮母居、愛有徧移、子騫衣寒、御車失捶)と榜題に記すもの(図四)を始め、同画像石前石室第七石の図(榜のみ、銘文は読めない)(図五)、開封白沙鎮出土後漢画像石の榜題に「後母身」「敏子愆父」「敏子愆」「後母子御」「子愆車馬」とする図、和林格爾後漢壁画墓の榜題に「蹇父」「閔子蹇」、孔子弟子図「閔子蹇」(後者は孔門弟子図の内)とする図が知られる。また時代は下り、六朝期のミネアポリス美術館蔵北魏石棺にも、榜題に「孝子閔子騫」と記す遺品のあることが知られるが、この中でも特に後漢武氏祠画像石については、古く宋代以来著名なもので、以降その図像解釈が積み上げられてきた画像石に外ならない。我が国においては、長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』二部「武梁石室画像の図象学的解説」⁽³⁾に、後漢武氏祠画像石の武梁祠右、後、左壁の三石における四十三図を解明し、孝子伝図十七



図四 後漢武氏祠画像石（第一石）閔損図



図五 後漢武氏祠画像石（前石室第七石）閔損図

その他が含まれ、清朝以降の後漢武氏祠画像石における孝子伝図研究の到達点とも言うべき、高い水準を示しているとされる。⁽⁴⁾ 本書の中で長廣氏は後漢武氏祠画像石(第一石)の閔損図について、師覺授撰孝子伝に、

父使損御冬寒失轡。後母子御。

と記すように、図像においても閔損や父親等とともに、閔損が轡を失った後に継母の子が車を御す姿で描かれていると考察される。だが師覺授に関しては、南史七十三に劉宋の人で(宋書五十一、元和姓纂十等(章宗源、隋書經籍志考証13、姚振宗、隋書經籍志考証20)、南史に、「後撰孝子伝八卷」と見えることから、師覺授撰孝子伝が後漢武氏祠画像石の典故とは考え難い。また韓詩外伝に、

子騫為父御車失轡。父持其手衣甚單。父婦呼其後母兒、

と記し、説苑(芸文類聚二十所引)に、

子騫為其父御車失轡。父持其手衣甚單。父則婦呼其後母兒、

と記し、敦煌本勵忠節抄にも、

騫乃為父御車失轡。父持其手衣甚單。父婦呼其妻、乃持後母之子、とする記述には、父が継母の子を呼び寄せたことを記すが、車を御したとは記さない。しかしながら、陽明本孝子伝(船橋本には「後母子御車」の記述無し)に、

時子騫為父御失轡。父乃怪之、仍使後母子御車。

とし、継母の子が車を御す姿で記されることは、問題としなければいけない。これは後漢武氏祠画像石(第一石)の榜題に、「子騫後母弟、子騫父」と車上の人物を示す記述と共通性があり、後漢武氏祠画像石

の閔損図が、陽明本系の孝子伝を拠り所とする可能性が考えられる。なお、開封白沙鎮出土後漢画像石の閔損図にも、榜題に「後母子御」と記す車を御す継母の子の姿が描かれ、また閔損図の構成が後漢武氏祠画像石(前石室第七石)の図に酷似している等の問題がある。後漢武氏祠画像石(前石室第七石)の図に関しては、榜のみ、銘文は読めないのが現状であるが、開封白沙鎮出土後漢画像石の構図から推測すると、同じく継母の子が車上に描かれていると考えられ、両画像石にも陽明本孝子伝の如きものに基づいていると考えざるを得ない。

さて今般、驚くべきことに、両孝子伝に記す閔損譚と曾參(曾子)投杼譚の図像を伴う、後漢期の人物画像鏡が存在することを新たに知った。それは村上英二氏蔵の孝子伝図画像鏡(図三)である。この孝子伝図画像鏡(以下、当鏡とする)については、『古鏡コレクション 開明堂英華』一〇四、一〇五頁に解説図版が載る。本書によると、当鏡の直径は二十・二センチで、重さ九二三・七グラム。後漢後期の製作とし、内区の二区画に閔損譚(図一)と曾參投杼譚(図二)の図を連続式に描き、残り二区画に神人車馬と歌舞の図を描く。内区の二区画には右側から「曾子母」「曾子」「閔騫父」と榜題を記し、織機に坐して後ろを振り返り、その手から杼(横糸を通す道具)を落とす曾參の母親と、跪いて拱手し、恭順の姿に描かれた曾參の図、その隣には閔損の父親を描き、閔損自身は描かれていないとする。解説においては、当鏡の主題文様を孝子伝から採られた図像であると考察し、閔損図について、

自分に冷たくあたった継母とその子(義弟)を許して愛情を注ぎ、

事実を知って離縁しようとした父を諫めた話

としながら、一連の後漢期の孝子伝図の一種とする。後漢期の孝子伝図については、先に挙げた遺品の他に数例を数えるのみで、鏡に描かれた孝子伝図というものは未だ報告されたことがない。また曾参投杼譚の図は、後述する後漢武氏祠画像石と当鏡のみに図像化された遺品であり、その意味で当鏡は後漢期の孝子伝図としても、大変貴重な遺品であるとしなければならない。私が当鏡について知り得たのは去年（平成十四年）の初旬のことで、その後、村上氏のご好意で撮影調査をする機会を得た。そこで、この機会を借りて、目下知られ得る唯一の後漢期の孝子伝図画像鏡について報告、紹介する。

二

当鏡に描かれる曾参図については『古鏡コレクション 開明堂英華』に、曾子と同名の異人が殺人を犯し、人違いたあわて者が曾子の母に知らせた。母ははじめはその知らせを信じなかったが、三人目の人が知らせに来るとさすがに動揺して、機を織る杼を手から落としたという話

と記し、曾参投杼譚を図像化したと考察する。この説話は両孝子伝のうち陽明本孝子伝下・13に唯一、

孔子使参往育、過期不至。有人妄言、語其母曰、曾参殺人。須臾又有人云、曾参殺人。如是至三、母猶不信。便曰、我子之至孝、踐地恐痛、言恐傷人。豈有如此耶。猶織如故。須臾参還至了、无

此事。所謂讒言至此、慈母不投杼、此之謂也。

と記すのみで、他の古孝子伝にはその所見がないことは、大きな問題とすべきである。⁽⁹⁾ 同話としては、敦煌本事森にも投杼譚が引かれ、そこに「出史記」と記されるように、史記樛里子甘茂十一の、

昔曾参之処費、魯人有与曾参同姓名者、殺人。人告其母曰、曾参殺人。其母織自若也。頃之一人又告之曰、曾参殺人。其母尚織自若也。頃又一人告之曰、曾参殺人。其母投杼下機、踰牆而走。

を引き、また戦国策秦策三の、

昔者曾子処費。費人有与曾子同名族者、而殺人。人告曾子母曰、曾参殺人。曾子之母曰、吾子不殺人。織自若。有頃焉、人又曰、曾参殺人。其母尚織自若也。頃之、一人又告之曰、曾参殺人。其母懼投杼、踰牆而走。⁽¹¹⁾

や現在零本で残る敦煌本春秋後語二、新序二に引用される。また後漢期の孝子伝図の遺品においては、後漢武氏祠画像石に「曾子質孝、以通神明、貫感神祇、著号来方、後世凱式、⁽¹²⁾ 撫綱」、「讒言三至、慈母投杼」と榜題を記す曾参図（図六）や、和林格爾後漢壁画墓の榜題に「曾子母」「曾子」、孔子弟子図「曾子」（後者は孔門弟子図の内）と記す図の唯一、二例が目下知られるのみであり、曾参の図像を描く当鏡の貴重性が改めて指摘できよう。⁽¹³⁾ さて、長廣氏は「漢代画像の研究」の中で、後漢武氏祠画像石の曾参図について、

母は機に坐っている。その左手と兩脚は機にかかっているが、顔と右手は、何かに驚いてふり返つたすがたである。手から落ちた杼が描かれている。曾子は地上にひざまずき、拱手をして、いか



図六 後漢武氏祠画像石（第一石）曾参図

にも孝子らしく、恭敬の情をあらわしている

と記し、図の下に「讒言三至、慈母捨杼」と横書きで記された榜題からも、この図像が戦国策に引かれる曾参投杼譚に由来するものと考察されている。しかしながら、氏が指摘される横書きで記された榜題「讒言三至、慈母捨杼」については、陽明本孝子伝の「所謂讒言至此、慈母不投杼、此之謂也。」（下線部筆者引）とする記述に最も近く、テキストとしての陽明本孝子伝が、孝子伝図の基であることの重要性が指摘できるであろう。以上、これらの考察から、改めて後漢武氏祠画像石と、当鏡との図像とを詳細に比較してみると、人物配列や図案等に驚くべき共通点が存在する。

三

まず、曾参図について、母親は後漢武氏祠画像石と同じく両脚を織機にかけ、後ろを振り返り、その手から落ちた杼が描かれている。その左側に榜題「曾子母」が記され、続いて二区画に跪いて拱手し、恭順の姿に描かれる曾参の姿がある。またその左側に榜題「曾子」が記され、下部には禽鳥が描かれる。この禽鳥については、通常の画像鏡に多々見られる禽獣図とも考えられるが、後漢武氏祠画像石や和林格爾後漢壁画墓の榜題に「孝鳥」と記す慈鳥譚の可能性も考えられる。そして、場面が変わり禽鳥の左側には、閔損の父親を描く。この図においては、後漢武氏祠画像石（第一石）に描かれるような御車から降り出して、右手を閔損の肩にかけている姿ではなく、御車から降り自

らの手を閔損の肩にかける、同画像石（前石室七石）の図（開封白沙鎮出土後漢画像石の図にも）に最も近いと考えられる。また閔損自身については、「閔子騫自身が描かれないのはスペースの関係であろう」（『古鏡コレクション 開明堂英華』）とする見解もあるが、左側の榜題「閔騫父」の上部に向きを反転して恭順の姿に描かれる人物が、閔損であるとも考えられる。元来、主題が閔損譚であるからには、父親だけを描くだけでは事足りなく、恭順の情を示す孝子の姿を描くことが本来の目的であるからである。

また、当鏡に描かれる曾参、閔損図は、後漢武氏祠画像石（第一石）においても同一の配列で相並んで描かれていることが大変注目される¹³。

このことは長廣氏が『漢代画像の研究』の中で、

次の図がやはり曾子とならぶ代表的な孝子の閔子騫であることは、この位置づけが偶然でない

と指摘される問題点であるが、後漢書明帝紀二に、

曾閔奉親、竭歡致養。

と記し、「曾閔」と並称することや、晋の蕭広濟撰孝子伝（初学記十七所引）に、

閔損与曾参、門徒之中、最有孝称、今言孝者、莫不本之曾閔。

と記し、曾参と閔損が一組で記されており、当鏡や後漢武氏祠画像石においても、閔損と曾参を並列に描いたものと考えられる。以上これらの考察により、当鏡と後漢武氏祠画像石とは図像的に、全く同じ孝子伝図が描かれていることが理解できる。このことは総じて、当鏡においても、陽明本系の孝子伝が図像の拠り所となっている貴重な証拠

を残していると言え、陽明本孝子伝の成立期を考える一級の資料的価値を有しているのである。

さて、後漢孝子伝図画像鏡に見る如き、孝子伝を主題とする人物画像鏡というのも、非常に珍しい。また曾参母の織機の一部に見られるような内区の絵柄が、外区にまで描かれていることなど、他の画像鏡に見られぬ箇所があり、出土地等も一切不明である。教示を乞いたい。

付記 後漢孝子伝図画像鏡の撮影調査及び、図版掲載をお許し下さった村上英二氏に対し、心から御礼申し上げます。

（図一、二、三は黒田彰先生の撮影写真。図四、六は容庚氏『漢武梁祠画像考釈』（北平燕京大学考古学社、民国25年）、図五は劉興珍、岳鳳霞氏『中国漢代の画像石——山東の武氏祠』（外文出版社、一九九一年）に拠る。）

〔注〕

- （1）新日本古典文学大系31『三宝絵 注好選』（岩波書店、平成9年）所収、馬淵和夫、小泉弘、今野達氏校注『注好選』に拠る。
- （2）黒田彰先生『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）II「孝子伝の図——後漢、北魏を中心とする——」参照。
- （3）長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』（中央公論美術出版社、昭和40年）。
- （4）黒田彰先生注（2）前掲書II一。
- （5）太平御覽四一三所引の師覺授撰孝子伝の本文を示せば次の通りである。

閔損字子騫、魯人。孔子弟子也。以德行稱。早失母後母遇之甚酷

損事之弥謹。損衣皆稿臬為、絮其子則繇績重厚。父使損御冬寒失轡。後母子御。則不然父怒詰之、損默然而已。後視二子衣乃知。其故將欲遺妻。諫曰、大人有一寒子。猶尚垂心若遺母有二寒子也。父感其言乃止。

(6) 黒田彰先生注(2) 前掲書一「孝子伝の研究」参照。

(7) 当画像石は、シャヴァンヌのMission archéologique dans la Chine septentrionale, Tome I, Première partie, La sculpture à l'époque des Han (Paris, 1913)に模図 (Pl. D, XLII, Fig. 1271) を収め、(キャプションに Dissin d'après un estampage de M. Paul Mallon による) V. Z. — Dalle de provenance inconnue に考証を収める。詳細は黒田彰先生注(2) 前掲書II、二一〇頁注24参照。

(8) 村上英二氏『古鏡コレクション 開明堂英華』(村上開明堂、平成6年)。他に、村上英二氏『創業120周年記念中国古鏡展 村上英二コレクション』(村上開明堂、平成13年)にも同解説図版を掲載。

(9) 曾参の投杼譚については、後世の二十四孝系の孝行録6や南宋の林同孝詩「閔子」にも所収される。

(10) 王重民氏等編『敦煌遺書総目索引』(商務印書館、一九六二年)の〈p.二六二二〉に、「事森一卷」とある。また王重民氏等編『敦煌変文集』下(人民文学出版社、一九五七年。二刷、八四年)には「孝子伝」として本文を収録するが、「孝子伝」という書名は『敦煌変文集』編纂当時、仮に付けられたものにすぎない。この問題について指摘したものには、王三慶氏「《敦煌変文集》中の《孝子伝》新探」(『敦煌学』14、89年4月)がある。なお、敦煌本孝子伝については、黒田彰先生注(2) 前掲書所収I一参照。以下、敦煌本事森に所引される投杼譚の本文を示せば次の通りである。

相投杼以傷懷。曾参為人孝、有人与曾参同名。忽有人告云、曾参

殺人。其母自知子孝、必無此事。三度來告、告母始投杼踰牆而走。觀。出史記。

(11) 戦国策においては、曾参の母親が驚き慌てる姿を「其母懼投杼」とするが、史記、春秋後語では「其母投杼下機」とする。以下、敦煌本春秋後語二(〈P二七〇二〉)の本文を示せば以下の通りである。

昔曾参処費、々人有与曾参同姓名者而殺人。々告其母曰、曾参殺人。其母投杼下機、踰牆而走。

(12) 六朝期の孝子伝図とされるネルソン・アトキンス美術館蔵北斉石床(以下、KB本とする)について、長廣敏雄氏は『六朝時代美術の研究』(美術出版社、昭和44年)第九章「KB本孝子傳圖について」を著され、KB本孝子伝図第三石三図について、「孝子董永説話の後段すなわち『天の織女が董永の婦となり機織の功をしめす』説話をあらわす」とし、董永譚の後段部分と考察される。しかしながら、当図には曾参図に見られる織機に向かい杼を落とさんとする母親や、曾参五孝の一つ嚙指譚における薪を担ぐ曾参と思われる人物が描かれており、六朝期唯一の曾参図として図像再考の必要性があらう。

(13) 和林格爾後漢壁画墓にも曾参、閔損の図は描かれ、榜題に「蹇父」「閔子蹇」「曾子母」「曾子」と記すなど、当鏡と榜題に似通った記述がある。和林格爾後漢壁画墓については、内蒙古自治区博物館文物工作隊編『和林格爾後漢墓壁画』(文物出版社、一九七八年)に模本が掲載される。

(やまかわ まさはる 文学研究科国文学専攻修士課程)

(指導教授・黒田 彰教授)

二〇〇二年十月十六日受理